

新しい年 2024 年を迎え、過去を振り返る

2024 年という新しい年を迎えたが、どうも気が晴れない。ウクライナとガザで戦争が続き、停戦の糸口もつかめない。日本も「新しい戦前」がますます現実味を帯びるような大軍拡、地方自治や大学自治の破壊が進められている。政治や経済の腐敗が蔓延し、先行きの見えない状況が続く。足もとの大阪では、夢洲万博や IR カジノ誘致に猛進する維新政治に翻弄されている。大阪の政治経済の展望を求め「試練」の時代が続く。

昨日レポートしたように、昨年 9 月で「後期高齢者」となり、体力面では衰えが目立つ。目の調子が悪く、小さな字を読むのがしんどくなってきた。本を読めなくなるのがいちばん辛い。体力面とは違って、気力は充実している。やる気満々である。とりわけ住民訴訟の原告として、夢洲開発に対抗する調査研究に力を入れている。年末に書いた『市政研究』寄稿論文などをベースに、夢洲開発について問題をまとめていきたい。

これを書きながら、ふと 10 年前ごとの過去を振り返ってみた。新しい年を迎えたが、過去の自分を見つめ直すことも大切ではなからうか。

10 年前の 2014 年 3 月に名古屋市立大を定年退職した。2 月 22 日 2 時から「最終講義」を行ったが、多くの在学学生・卒業生、市民のみなさんに参加してもらった。あのときの感動は忘れられない。今年 3 月で退職してから 10 年になる。名古屋から大阪に転居して 6 年経つが、コロナ禍もあり名古屋に出向くことも少なくなり、大学とも疎遠になってしまった。

20 年前の 2004 年 4 月から大学院人間文化研究科長と人文社会学部長を 2 年間務めた。大学「法人化」準備に追われていた頃で、キンチョーの毎日であった。会議の連続、文科省への教職課程などの申請などに明け暮れていた。同僚や職員のみなさんのご支援でなんとか「大役」をやり遂げることができた。2005 年 3 月からは、愛知万博開催とも重なり、研究科長として何かとプレッシャーを感じたものだ。

30 年前の 1994 年は、名古屋市立女子短大で教えていた。1979 年に就職して 15 年が経過した頃である。短大教員として講義やゼミに力を入れるとともに、研究面でも成果をあげていたと思う。中部空港や愛知万博などの大規模開発が動き出し、共同調査研究に参加した。大学では「短大改革」の流れのなかで、名古屋市立大との統合再編が進められ、改革の波に流されていくことになる。

40 年前の 1984 年は名古屋市立女子短大に就職して 5 年目。若き教員として、楽しい短大生活を送っていた。今では考えられない大学祭「徹夜討論」、スキー合宿、パスケ顧問などが記憶に残る。

50 年前の 1974 年は大阪市大の大学院修士 2 年。宮本憲一先生のもとで修士論文を書きながら、堺・泉北コンビナート共同研究の事務局を務めた。若き青春時代、恋もした。それから半世紀。「後期高齢者」となったが、ふたたび大阪の地をつ駆け回っている。

(2024 年 1 月 1 日)